



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	社会理論における観察概念から見たメタファーの機能
Author(s)	鈴木, 純一; Suzuki, Junichi
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 72, 75-93
Issue Date	2019-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73283
Type	departmental bulletin paper
File Information	MC72-4_Suzuki.pdf



社会理論における観察概念から見たメタファーの機能

鈴木 純 一

1. はじめに

本考察は、社会理論における「観察」概念と、言語と認知（さらには表現行為一般とその受容）における「メタファー」という現象を、その過程としての側面（切断と接続、意味の二重化等）から比較検討しつつ結びつけることによって、両者の機能的関連性を浮かび上がらせると同時に、この複眼的・相互的な観点から明らかになる論理構造上の側面（差異化とメタレベルへの移行、自己言及と逆説等）に着目し、そのメディア的な意義と展開可能性（世界解釈の継続的更新）を考察することを目的としている。

メタファーという現象を、機能的な側面から考えると、「字義通りの意味」（暫定的に「本義」と呼んでおく）に揺らぎをもたらし、指示するものと指示されるものの確定的な対応関係を回避しようとする働き、そのような志向性をもつ表現と特徴づけることもできる。ことばの（あるいは「表現行為一般」の）解釈を、一義的な対一関係からずらし、「字義通りでない意味」（暫定的に「転義」と呼んでおく）をもたらすことで、表現に「遊び」としての幅がもたらされる。¹⁾そして、この意味の「多重化」ないし「ずれ」という現象が生ずるためには、何らかの文脈的な条件や妥当性、必然性があると想定できる。

とりあえず、その条件、メタファーが生成するための文脈上の要件については、いまは問わない。確認しておきたいことは、メタファーがメタファーであると意識化されるのは、それを受け取り理解する場、すなわち「観察（する主体）」の場であるという構造的条件である。ある表現を「本義」ではなく「転義」として解釈するという必然性は、その表現が「字義通りの意味」では何らかの形で妥当性を欠くこと、その非妥当性が「字義通りではない意味」によって妥当性を回復すること、このようなプロセスが、段階的であれ同時であれ、観察され理解される場で生じていること、による。つまり、メタファーは観察（対象ではなく主体）と相関的に成立する現象であると、まずは想定される。²⁾

社会学者のルーマンは、「コミュニケーション」という概念を「情報・伝達・理解」という三局面での選択過程とそのオートロジカルな継続性と定式化した。その際、注目すべきことは「理解」という局面で行われている作業が「情報（≡表現形態）」と「伝達（≡表現内容）」の差異の「観察」であるとした点である。可視的になっている「情報」を、そのままの形ではなく、そこから引き出しうる「伝達」に転換し、選択的に意味づけ解釈することが「理解」となる。そして、こ

の「理解」(観察)そのものが更なる「情報」(対象)となり、「伝達」(表現形態≡メディア)され、再び両者が差異化される形で「理解」(次レベルにおける観察)が生じる。このコミュニケーションの自己再生産システムをルーマンは「オートポイエーシス」と特徴づけた。³⁾ここでは、理論の詳細な検討は控えるが、社会理論におけるコミュニケーション概念において構成要素の中心となっているのが「観察」⁴⁾であるということ、およびそのプロセスが、先に見たメタファーという表現形態の解釈プロセスとパラレルな関係になっていることに着目しておく。

このような「差異化と再結合の連続体としてのコミュニケーション」という形態は、メタファーの理解の場における「本義と転義の意味の二重化(=切断)」と、「二重化された意味の一つの表現における再度の重ね合わせ(=接続)」という、一見相反するベクトルが(そしてこの「接続と切断」の両義性こそが「メディア」機能の核心であると考えられるが)同時に含意されている。

ある表現の解釈における二重化と再結合というこのような意味の揺らぎ(振動)という状況に関しては、ルーマンのシステム理論においても同様の論理展開を引き出すことができる。ここからルーマンは(観察する)システムにおけるパラドクスとトートロジー、メタレベルとオブジェクトレベルの交錯等、論理上想定される問題群を(彼独自の)コミュニケーション概念に即して展開した。本稿ではそのような知見を援用しながら、他の学問領域からも引き出しうる、メタファー(加えてメトニミー、シネクドキ、イロニー)がもたらす「類推と知の組織化」、「オブジェクトとメタの階層性のねじれ」、「メディアとメッセージ」、さらにはこれらの相互入れ子的な関係性の構造の記述と解明を試みる。

2. 記号的対象化と組織化としてのメタファー機能

声による伝達が「知」の形態として主流であった時代から、文字が使われるようになり、さらには活字と印刷術が広まっていくにつれて、安定的な「知」の定着と、分類、体系化が進行していったことは、様々なメディア史研究が共通して伝えるところである。⁵⁾すなわち、人々が居合わせる場での声を中心にした呪術的儀式、口誦で伝えられる世界像、行動様式としての神話が、限られた範囲での共同の「知」として機能した時代から、世界が文字・記号として客体化され、対象として操作可能になり、その範囲が著しく拡大することで、世界の客体性と社会・個人の主体性という関係が確立する時代への移行である。前者は共同体験と相互作用の直接性により世界と自己の、すなわち観察対象と観察主体の関係が未分化かつ曖昧であったが、後者の段階になって初めて観察対象(オブジェクト・レベル)と観察主体(メタ・レベル)の、見かけ上の、階層性が成立する。世界のあらゆるモノ、事象、関係は分節され、分類され、関係づけられ、文字化あるいは記号化され、秩序化・組織化が進行する。この仮説に従えば、主客の分離は記号の発生と同時にである。ちなみに、この「外的世界=現実」の「記号による対象化」自体をもニーチェは

「メタファー」と呼び、レイコフは「世界の組織化」の原理を「概念メタファー」に見た。これらの考察は、現代のメタファー研究の前提となっていると考えられる。⁶⁾

さらに推し進めれば、記号化された世界が知の体系として現出した後に、その記号化された世界そのものに対しても更なる記号化が折り重ねられ、世界は多層的に記述され把握される。これにより、複雑化した事象でも操作可能なものへと転換されるようになる。その形態については次節で触れるが、このような記号化と複層的な世界把握は、印刷と出版、複製技術の発展とメディアの浸透により、蓄積され、標準化され、いわゆる近代の、メディア論的に言えば、「均質で空虚な時間と空間」の出現を促した。⁷⁾ 近代社会の基本的な単位とされる「国民国家」の条件ともなったこの世界の観察方式は、人々の世界の理解にある程度の共通性をもたらし、想像の形式の相互予期を推進したとも考えられる。すなわち、人々は互いに、世界に対して、同じような境界線を引き、同じようなスタンスで客体化しているのではないか、という想像の相互入れ子状態が成立する—そのような共同体が出現した、という想定である。

むろん、このような世界観の間主観化と知の組織化は、時代とともに常に更新され続ける。その際、対象となる世界の拡張や関連付けの原理として、メタファーが、さらにはメトニミーとシネクドキが重要な役割を果たすと考えられる。

3. メタファー・メトニミー・シネクドキ—世界の関係性の更新

佐藤信夫の『レトリック感覚』および『レトリック認識』によると、比喩の主要なものは15に分類されるという。さらに、瀬戸賢一の『日本語のレトリック』では、比喩を広く捉え、30の項目に分けて紹介している。⁸⁾ 他にも様々な分類方法を挙げることができるが、代表格として挙げられるのがメタファー（隠喩）であることは共通しているようだ。場合によっては、メタファーという言葉は比喩的表現の総称としても使われる。また、多くの文献で、メタファー、メトニミー（換喩）、シネクドキ（提喩）の三つが、比喩の中でも特に重要な形式として扱われている。

少し整理しておきたい。メタファー（隠喩・暗喩）は、あるものを何かと「見立てる」とことと説明される。良く引かれる「目玉焼き」という例に沿えば、焼いたタマゴを目玉と「見立てる」。その際、隠喩は、これは「目玉のようだ」とは言わない。「ようだ」を付けた表現は「直喩」であり、「隠喩」と区別される。この区別は大きい。つまり「ようだ」を付けるということは、「比喩」であることが明確に意識化されている、あるいは、そのことが明示的に表現されている。対して、「目玉焼き」といった場合、焼かれたのが「タマゴ」であるか、「目玉」であるか、はたまた別の「目玉」と表現される何かであるかは、明示されていない。この差異は、後述するが、メタファーの「創造性」（＝新たな世界分節）を特徴づける場合に重要な意味を持つてくる。

続いて、メトニミー（換喩）は、基本的に、近接（隣接）関係による比喩とされる。よく引き

合いに出される例として「赤ずきん（ちゃん）」がある。「赤ずきん」はそれをいつもかぶっている「女の子」を意味しているわけだが、「赤ずきん」と「女の子」は近接ないし隣接の状態にある。メトニミーは、瀬戸に従うと、「意味変化が何をきっかけにして起こるかという観点から」3種類に分類される。①語用論的メトニミー、②統語的メトニミー、③語彙的メトニミーの3つである。（瀬戸2017：165）

もう一つ、シネクドキ（提喩）について。辞書などでは、全体や種類を表す言葉が、その一部分の物事を表したり（「花」→「桜」）、逆に部分や要素を表す言葉が全体や類を表したり（「手が足りない」→「働く人が足りない」）するレトリック、と説明される。いわば部分と全体の関係で成立する比喩であるが、両者の関係も「隣接」に含め、シネクドキをメトニミーの一種だとする考え方もある。いずれにせよ、二つの表現の間を「部分と全体」という関連性でつなぐという機能には変わらない。このような比喩の機能的な役割がここでは問題となる。

「関連付け」の方法という観点から見れば、狭義の意味での（つまり比喩全体の総称としてではなく、あくまでも「見立て」機能の比喩という意味での）メタファーがいちばん大胆な働きをする。というのも、世界（対象）を記号へ、事象を言語へ、かけ離れた（「近接」という状況にはない）出来事同士、既存の関係性が想定されていない複数の言葉同士を関連付けていく可能性を持つからである。対して、メトニミーあるいはシネクドキは、すでに当該の表現が置かれているあらかじめの関係性（環境・文脈）を前提とし、そこから、複数の語彙を結び付けたり、関係の特徴づけたり、あるいはそれらを組織化・体系化したりする。

メトニミー（シネクドキを含む）による語彙の結び付けの形式、関係性の在り方に関して、瀬戸（2017：172）は、その転義のパターンによって、語彙的メトニミーに含まれる空間的メトニミーを6種類に分けている。①全体で部分、②部分で全体、③入れ物で中身、④中身で入れ物、⑤図地反転、⑥空間隣接の6つである。世界に関して、空間的な観点を基礎に置きながら、そこに含まれる事物（事象）相互の関係を規定するとともに、喩えられるものから喩えるものへと転義的な操作をおこなうことで、われわれは対象を把握する。

その成立のメカニズムや頻度、傾向等には違いがあるものの、①②③④⑥に関しては、直観的にイメージが可能だ。いくつか具体例とともに見てみれば、「赤ジャンパーを追う」という表現では「赤いジャンパー」は「赤いジャンパーを着ている人」を意味するだろうし（②の関係）、何かを隠しているのではと疑われて「鞆を見せて欲しい」と言われた場合、「鞆」とは「鞆の中身」のことだと解釈するだろう（③の関係）。前後や上下等の空間的位置関係はもちろん、このような転義的動きのメカニズムの要因となる（⑥の関係）。

少し説明が必要なのは⑤であろう。瀬戸が挙げている例は「ペンキを壁に吹き付ける（spray paint on the wall）」と「壁をペンキで吹き付ける（spray the wall with paint）」の場所句交換のパターンであるが、「ペンキ」と「壁」が、いわゆるゲシュタルト心理学における「図と地の反転」と同じような構造をもっているという。この転換は、注目され指示されるものと、それを可視的

にしている背景との関係が逆転することから生じる。

ところで、このメカニズムを、「空間的な関係」から「論理的な関係」へと「転義的」に移動させれば、極めて興味深い転換が可能になる。というのも、後述するが、論理的構造におけるパラドクスとトートロジーという関係を記述する場合、視覚的イメージとして用いられるのがこの「図と地」の反転構造だからである。この意味で ここでは⑤をメタファーの一変形として捉えておく。

さらに言えば、パラドクスあるいはトートロジーという関係にあるものは、このような比喩的な表現によってしか記述できないとも考えられる。この場合の比喩とは、言語による表現に限られるものではない。例えば絵画においては、空間的な表象において、表から裏への、上昇から下降への、図から地への移行が描かれる（エッシャー）。音楽においても上昇する音階と下降する音階を交差させたり、主旋律と副旋律の交換（図と地の反転）が規則的におこなわれたりと、同様のメタファー的構造を持つ表現が可能である。

このような構造を、社会理論の領域において、描写していると思われるのがルーマンのシステム理論である。前述したように、「システム」ないし「観察」の基礎的な「オペレーション」とされているのが「システム／環境」の差異化と、一方（システム）を指示することにあつた。しかし、ここでとどまるわけではない。この観察自身が更なる観察によって差異化され、最初の（一次レベルの）観察＝「システム／環境」差異そのものが再度システムの中に現れる（二次観察）という再帰的構造が内包されている。この絡繰りをルーマン自身は「リエントリー（再参入）」と定式化している。このリエントリーをメタファー（ないしメトニミー）の構造に重ね合わせて検討してみると、メタファーの機能的構造が論理構造の解明にいかに関与するかが見えてくるが、このことに関しては後述する。

ここではメタファーおよびメトニミー、シネクドキが、その「ずれ」を作る力、すなわち「二重化する」転義的機能によって、世界の対象化、関連付け、組織化、システム化に寄与していることを確認しておきたい。その際、とりあえず狭義の意味でのメタファーは、隔たりの大きなもの同士をつなぐ力を有しており、レベルやカテゴリーを超えた転換をも可能にしている、と解釈される。それに対し、メトニミー（あるいはシネクドキ）は、あらかじめ規定された関係性（隣接性、包含性、等）によって、基本的には語彙と語彙あるいは同カテゴリーのもの同士をつないでいく機能を有している。メタファー、メトニミー、シネクドキの機能の組合せにより、表現（特に言語）は、時には大胆な、時には緩やかな意味の規定と転義、そして再規定が行われ、組織化される。そして、その動きが更なる転義的な動きを誘発する。

このような機能は基本的に、メディアとしての「接続」機能を果たしている。また、その過程で、パラドクスやトートロジーのような、一般には記号的にしか表現されえない論理構造に対しても、メタファー（そしてメトニミー、シネクドキ）は、可視的（具体的）イメージを体現しているという意味でも、重要なメディア的役割を果たしている。

4. 「創造的メタファー」と「知の体系」の更新、あるいは 「想起」による組み換え

「死んだメタファー dead metaphor」と称されるメタファーがある。「死んだ」とは、それがメタファーであることがほとんど意識されることがなくなった状況、すなわちメタファーが、本来潜在的に持っているであろう「意外性」や「驚き」「発見」等の効果が期待できなくなった表現である。最初に挙げた例の「目玉焼き」は（日本語母語話者にとって）、すでにメタファーであることが意識されなくなっている。このような表現は数知れない。基本的に、共通するのは転義がすでに本義になっているということ、すなわち「転」という動きが、それが使われ受容される「理解」の場において感知されることがなくなっているということである。

リケールも著書の題名にした「生きたメタファー」とは、とりあえずその逆と想定される。すなわち、それが使用される場において、その表現のもたらす意外性、驚き、面白さ、発見効果などが感知され意識化されるものをいう。その表現を受け取り観察するものは、何らかの引っ掛かり、自明でないものを感じ取る。今までの語彙の使用のストックでは処理しきれない、あるいは従来の意味理解とは明らかに異なる何かがそこにあるのを感じる。佐藤信夫が引用した石川淳の「笑のさざなみ」（佐藤1992a: 118）という表現がある。この隠喩に関して佐藤は以下のようにコメントする。

しかし、その「さざなみ」が何であるか説明しろと言われれば、答えあぐねるだろう。すなわち、この隠喩は、XのかわりにYと言っているのではない。Xという適切な名称があるのなら、わざわざY（さざなみ）などと言いかえるにはおよぼまい。（佐藤1992a: 120）

顔のある表情を、これまででは用いられないような語彙で表している。それは、観察し受け取るもの（おそらく、作者もまたそこに含まれる）にとって「想定外」の「発見」であり、言い換えれば、あたかも「創造」の場に立ち会っているかのような効果があるのだろう。世界が新たに分節され直されたかのように感じるかもしれない。このような「転義」の力はどこから来るのだろうか。「謎」であるから「創造」と言えるのだろうか。少なくともこのような力こそが、そもそもメタファーの所以であろう。既存の関係性に基づいた語彙の横滑りではなく、新たな分節（＝世界の創造）が生じているような思いに捉えられる、という効果である。

前節でその成立過程とプロセスについて説明を試みた、メトニミーとシネクドキによって強化されていく知の組織性、体系性に対し、メタファーのこのような力は、新たな動きを誘発する刺激となる。既存の意味連関体に対して、このようなメタファーは、一時的にせよ、新たな（不安定な）まなざしをもたらす。「既存の」という意味は、すでに長年に渡り用いられ、安定的な（安心

安全な) 意味を想起させるようになった表現形態のことを指す。これに更新が迫られる。

ところで、このような「表現形態」は、言語に限られたものではない。映画におけるシーン、絵画の構図、音楽におけるコード等、「既存の」といいうる形式的表現の歴史的な蓄積がほぼすべてのジャンルに認められる。そのような安定的な「意味」のシステムを動揺させ、新たなリアリティを獲得する表現技法が、常に模索され、更新されている。それによって伝統的な芸の世界でも、新たな表現形式が作り出されると同時に、世界に対するスタンスの変化、あるいは新たな境界による世界の分節が、場合によっては現実よりも先行する形で見られることも珍しくはない。

「創造的メタファー」と称される形式は、このような特徴がラディカルになったもの、と言えようか。メタファーとされる表現は、事前に意図されたものではなく、事後にメタファーと確認される、すなわち、その発生の時点ではメタファーとは（「見立て」であるとは）意識されずに「字義通り」に、すなわちそのように観察されたのだとも考えられる。この点に関して野矢の議論をとりあげてみる。野矢は、例えば「山が笑っている」という表現が生まれた背景を次のように説明する（少なくともその可能性を論じている）。すなわち、本来「本来山は笑わない」のを意識しつつ、あたかも山の見せる光景が笑った表情と見立てる、という一般的なメタファー理解を越えて、実際に山が笑っているのが見える、という状況があり、それを「字義通り」に「山が笑っている」と表現した可能性である。⁹⁾ このとき観察者にとって、実際に「笑っている山」が見えている。もちろん、事後的に考えれば、この「笑っている」という表現は、結果的に「見立て」であり、喩えであり、隠喩であると考えることで整合性が保たれるのだが、それはあくまでも後付としての解釈にすぎない。

次のように言い換えることもできるだろう。すなわち、観察者にとって「山は笑っている」という表現は、「字義通り」の表現なのであって、決して転義的な意味なのではない。少なくとも、その表現の成立に関してはそう考えることができるということである。これに関連して、デイヴィッドソンのメタファー論における意味の議論が思い起こされる。メタファーにメタファー的な意味（転義）があるというのは誤りで、メタファーといえども「字義通り」の意味があるだけである、というのがデイヴィッドソンのテーゼであった。¹⁰⁾

一見、野矢の創造的メタファー解釈における「その通りに見える」と、デイヴィッドソンのいう「字義通りの意味しかない」という考えは、パラレルな関係にも思われる。が、根本的な違いがある。野矢の創造的メタファーにおける「その通り」というのは、観察のリアリティから発し、それが言語的表現になってはじめてその不整合が可視化され、結果「新たな相貌」としての（メタファーとしての）意味付けがなされたとするものである。すなわち「その通り見えた」という一次観察の現実がある。その観察を、観察者から一步離れて再び観察した場合に、つまり二次観察の段階で言語的な整合性を保とうという機制が働いて、メタファーという「新たな意味＝相貌」を生み出したと考えられる。

それに対して、デイヴィッドソンの主張の核は、次のようなものであろう。すなわち、メタファ

ーがメタファーであるためには、その表現が一般的な用法から見て不自然なものであること（＝効果）がなければならない、言い換えれば、「字義通り」と解釈されるからこそ、その表現がメタファー的な効果と意味を持つことになる。この場合、「字義通りである」ことは、「その通りに見えた」という一次観察のリアリティからくるものではない。まず観察される（させる）のは、言語的な意味の不整合であり、その言語的不整合というリアリティの導入こそが、効果としてのメタファーという意味づけができる根拠となる。

しかし、いずれにせよ、この二重性がメタファーの最も根源的な力、すなわち世界の分節の引き直し、境界の再設定、そしてそれにともなう表現体系の再構成という、終わりのない意味の更新が継続されるオートロジカルな原理となっている。¹¹⁾ その際注目しておきたいことは、この（再）分節化をもたらし創造的メタファーにおいて、接続機能よりも切断機能に重要性が置かれている点である。すなわち、メタファーは既存の意味の関連を一時的に切断しつつも再接続することが前提となるが、この「創造的メタファー」においては、その再接続が保証されない切断がおこなわれる。むしろ二次観察によって、従来の意味と新たな用法とのギャップが観察され、埋め合わせが行われ、最終的には表現体系の中に収められる場合があるにせよ、このようなメタファーの中心的機能は「切断」にある。これはメトニミーやシネクドキが、語彙の「接続」をより精緻なものとし、複雑な適用を可能にし、入り組んだ関連体に組み上げていくのとは対照的な動きともいえる。

もちろん、このようなメタファーも、そのような用法が一般化し、慣用的に使われ、当初の意外性や発見性が薄れていくにつれ、切断機能よりも接続機能が優位となる。「生きた」メタファーの生きている時間は、一般に、それほど長いものではなく、衝撃的な印象や驚き、分離の効果は長続きしないものなのであろう。¹²⁾

5. メトニミーとメタファーの相互性－「観察」と相関的な「世界」

メタファーによる世界分節・創造・再分節・再創造、そしてメトニミー（とシネクドキ）による分節化された世界の関連付け・組織化・体系化、この二つの方向性が軸になる。その際、両者にとって欠くことのできない要素でもあり契機でもあったのが「観察」という概念であった。創造的メタファーにとって、観察とは根源的一次観察、すなわちリアリティの直接観察を意味する。このメタファーは、対象がどのように見えるかをあらかじめの既知の意味体系から選び出す「見立て」ではない。一時的にせよ、実際にメタファーとされる表現のように観察されたのである。その時の支配的な力は観察主体にある、あるいは観察対象と不可分な主客一体の観察にある。それに対してメトニミーないしシネクドキは、その観察のコードが、隣接あるいは包含という形で、すでに与えられた世界連関の規則をもとに成立していた。このコードはあらかじめ対象が持つて

いたコードである。このことから考えるに、観察の支配的な力は、観察対象、すなわち主客分離された世界の客体側にあるといえる。いずれにせよ、主体が主であろうが、対象が主であろうが、「観察」によってメタファーとメトニミー（とシネクドキ）は現象することになる。

ここで次のような問いが生じてくる。すなわち、そのように観察される対象とは、観察と相関的に生じるのであろうか。言い換えれば、観察が対象を呼び出すのであろうか、世界は観察によって（のみ）存在するのであろうか、世界は構築されるものでしかないのであろうか。一般に「構築主義」ないし「構成主義」と呼ばれる視点である。¹³⁾

近年、実在論としての世界解釈に対し、傾向としては反省的な見地から、あるいは批判の装置として、構築主義的な視点が頻繁に見られるように（主流に、と言っていいかもしれないが）なってきた。属性、境界、価値等の一元化を批判的に見直すうえでも、従来の世界観の相対性を強調し、作られてきた、あるいは強いられてきたものと見なす構築主義という考え方は、場合によっては極めて有効なものであろう。既存の制度を揺るがし、境界を曖昧にし、多様な価値の共存を進めるような方向へ—このようなスローガン自体も構築主義的なものであり、すでに自己言及構造の域にまで達していることを窺わせる。

大澤真幸はルーマンのシステム理論をラディカルな構築主義（根源的構成主義）と見なし、その位置づけを次のように説明している。

ルーマンの到達点は、システムに固有の観察の操作との相関においてのみ実在を捉える、根源的構成主義である。彼は、それを、オートポイエーシス・システムの理論と応用と拡張を通じて実現し（ようと）した。（・・・中略・・・）少なくともカント以降の哲学は、素朴な実在論を打ち捨て、相関主義を基本的な前提としている。ルーマンの社会学が採用した根源的構成主義は、近代哲学のこうした方向を極限にまで推し進めた結果だといってよいかもしれない。（大澤2018：62）

他方で大澤は、そのような相関主義の乗り越え、克服の試みを、メイヤスのいわゆる「思弁的実在論」を引きながら疑問視する。「われわれの認識の有限性を、そのまま、絶対的な実在のための積極的な条件へと反転させている」メイヤスの試みに対して、大澤は最終的にネガティブな結論を下す。思弁的実在論では、実在が偶有的（≒有限的）であることを我々が知りえる由来が説明されないからである。しかし、大澤はここから、次のような大胆な展開を試み、構築主義の別の乗り越えの可能性を論じている。それは、パーソンズに発し、ルーマンが洗練された形に整えた「二重の偶有性＝ダブル・コンティンジェンシー」¹⁴⁾ の概念、すなわち自己の選択と他者の選択の二重の偶有性の、前提と結論の切り換えし、あるいは反転である。

私と他者が存在しているというコンテキストにおいてのみ、つまり私と他者の存在を抹消する

ことができないようなコンテキストにおいてのみ、偶有性ということが意味を持つ。一方の偶有性と他方の偶有性が足し算されて、二重になるわけではない。偶有性そのものが、自／他の二重性を前提にしているのだ。(大澤2018: 65)。

大澤は、この概念に、「根源的構成主義が含意している閉鎖的な循環を破る」可能性を見ようとする。

この考え方を少しメタフォリカルにずらしてみたい。根源的な構成主義は観察（自己）と相関的に成立する。しかし、そこには、(二重の) 偶発性（偶有性）のパラドクスという形で、すでに他者の視点が内包されている。このパラドクスは、二次観察においては観察主体も観察対象となりうるということ、すなわち観察対象の受動的論理と、観察主体の能動的原理の、非対称的な（＝レベルを移動させる）交換（＝反転）によって説明される。

ところでメタファーは、「知の共同体」の生成と強化、更新に利用され、現在の科学ないし学問という制度の中核的方法論でもある。学におけるメタファー（とメトニミー）の役割については今まで多くの研究領域で語られてきた。文学研究やテキスト論における直接的な分析はもちろん、認知心理学や認知言語学における認知や言語の形式として、歴史学における時代特性の把握や想起と集合的記憶の方法論として、社会学における現実描写のツールと会話分析の指標となる要素として、さらには脳科学や工学的な情報処理、人工知能や自動翻訳における意味接続のメカニズム等、人文科学、社会科学のみならず生命科学や工学等の理系の分野においても、メタファーや比喩は、社会や技術の能力・特性と妥当性を測る一つの試金石としての意義を持っている¹⁵⁾。それこそレイコフが「Metaphors we live by」(レイコフ1986)と著書の題名にした状況は、学問の様々な領域にも浸透しているのであろう。

法におけるメタファーの浸透と意義を研究したものに松浦好治の『法と比喩』(1992)がある。松浦は、この研究の目的を、世界の把握における文字よりも身体を通すことの重要性を指摘した後で、次のように書いている。

本書は、このような視角から、文字化・命題化の試みをはみ出すような法の部分と法命題との関わり・相互作用を考察することを考察することを主たる目的としている。(・・・中略・・・)
本書で中心的に行うのは、われわれが人間の生と死、権利と義務、理想と現実にかかわる差し迫った法的問題(・・・中略・・・)に取り組んで、問題解決のために思索と努力を重ねていく場合に、そのプロセスのきわめて重要な段階において必ずといってよいほど登場する比喩(メタファー)、類似(アナロジー)、擬制(フィクション)などが文字・命題レベルの法とその舞台裏にあるものをどのように結びつけているかを分析し、検討することである。(・・・中略・・・) 本書は、比喩、類推、擬制などは法的世界に例外的に見られる病理現象ではなく、正常な生理現象であることを論証しようとする試みである。(松浦1993: 6)

三つのことを確認しておく。ひとつは、比喩（メタファー）、類似（アナロジー）、擬制（フィクション）等が、従来まで考えられてきた「病理現象（マージナルな現象）」のではなく、法的な思考の極めて重要な局面において登場するということ。二つめは、その際、メタファー等の比喩的な表現の役割は、文字・命題レベルにある（すなわち現実のメタレベルにある）法（文）と、差し迫った具体的な（すなわちオブジェクトレベルにある）問題・課題とを結びつけることであること。三つめは、上記の二つのことから導かれるが、ここでは（文字化された）法・命題レベルと具体的な現実的な問題のレベルを区分し、両者を結び付けことが法的実践の課題となっていること、この三点である。

法のレベルと現実問題の「結びつけ」の形をどのように論じているか、もう少し詳細に追っておく。具体的事例として「代理母」問題を取り上げながら、松浦は当時は前例がなかったこの問題をどのように把握するかという課題にとって、メタファーが如何に役に立ったかを説明し、次のように一般化する。「一般的に言って、いままで経験したことのない新しい状況に遭遇した場合、（・・・中略・・・）われわれは自分たちに馴染みのある状況やよく知っている現象と引き比べながら、新しい状況の中になんらかの類似関係を見だし、そこから新しい状況をとらえようとする。」¹⁶⁾ この説明は、メタファーの一般的な説明、すなわち類似性による「見立て」の説明とほぼ重なる。続いて、松浦はこの代理母問題をめぐる議論のなかで、どのような比喩（メタファー）が用いられたかを検証し、その比喩によって問題に対する見方、評価の観点、展開の可能性などが規定されていくことを明らかにしている。代理母問題は、「子供の売買」「サービス提供」「間借り」「売春」「無賃乗車」「南北問題」「養子縁組」「慈善行為」「選択の自由や自己決定権」「バランス」等、多様なメタファーの下で語られると同時に特徴づけられ、議論の方向性が規定される。またこのような比喩の関連付けをメトニミーあるいはシネクドキによって行うことで、対象を規定する語彙の組織化ないし体系化も進むことになる。松浦は、このような問題の特徴づけを「問題設定」の機能と言い換え、ゴードンの「信仰体系」を引き合いに出しながら、その構造的な「創造性」についてまで言及している。このような性格づけを可能にしているのは、メタファーが一次観察から二次観察をもたらす原理、言い換えればメタレベルに移行する原理と解釈されていることによると考えられる。

法的実践のみならず、法学においても「比喩＝メタファー」は、同じように「取り上げるべき学問的課題の選択、研究対象の取り扱い方、知識の体系化の仕方、法学という知的営みの性格と位置づけなど広い範囲にわたって、法律家の発想や行動の指針になっていると考えられる」（松浦1993：135）とまで述べ、先行研究の「比喩」を利用しながら「解釈システムの公理系化」と表現する。ゆえに、クーンに倣って、比喩の選択はパラダイムの選択でもあるとされる。しかし人としての科学者のパラダイムは、古いものから「よりよい」新しいものへと簡単には移行しない。なぜなら、パラダイムとは信仰であり、「改宗」することは、それまでの信念体系（これは多くの成功体験と結びついているのであろう）を変更することでもあるからだ。メタファーは、先

の説明によると、問題設定のパラダイムでもある。とすれば、パラダイム同様、ここにメタファーの主観的信念の問題も浮かび上がってくる。メタファーは、その主観的な選択から見れば、一次観察レベル、すなわちオブジェクトレベルにあるともいえる。こうして、法学という学問領域においても、メタファーという現象は、一次観察と二次観察の交錯し反転する表現形態、オブジェクトレベルとメタレベルを往還しながら、すなわち観察主体と観察対象の非対称的論理を交換しながら観察を継続するプロセスとして解釈できるレベルにおかれたことになる。

もうひとつ、歴史学におけるヘイドン・ホワイトの喩法についても言及しておく。¹⁷⁾ というのも彼は『メタヒストリー』(ホワイト2017)のなかで、歴史の時代把握の形式的ユニットを、喩法の観点からの説明を試みているからである。その際、彼は喩法を、メタファー、メトニミー、シネクドキ、そしてアイロニーの4つに分け、それぞれがどのような歴史把握を可能にするか、あるいは歴史解釈の原理となるかを分析し、この4つの観点が段階的に進化すると同時に、再び元に戻る形で連続的に循環する状況を、近代ヨーロッパの歴史学を素材に跡付けている。その妥当性についてはひとまず保留しておく。注目すべきなのは、メタファー(対象化)、メトニミー(関連付け)、シネクドキ(体系化)、そしてその過程全体の破壊的更新としてのアイロニーという特徴づけである。ここにも先に見た観察のオブジェクトとメタ、一次と二次、客体と主体といった関係の非対称な交代が中心的なメカニズムとなっている。この構造は、突き詰めれば、すなわち厳密に論理的な展開をすれば、観察対処と観察主体の反転と両者のメッセージの不整合(=自己否定する自己言及文)を引き起こし、決定不可能のパラドクスを呼び出すか、あるいはその禁止によるトートロジーへと陥ってしまう。メタファー一般の構造、あるいはメタファーのラディカルな最終形態であるこのようなアイロニーの論理性。次節はこのことについて考察したい。

6. 観察原理そのものへの抵抗としてのアイロニー

アイロニー(ドイツ語ではイロニー)と呼ばれている表現形式を暫定的に定義づけると以下のような形になるであろう。すなわち、ある表現を何らかの形で(多くは引用という形で)提示しつつ、その言葉の持つ「字義通りの意味」に対する否定的なニュアンス(多くは皮肉や否定)を付加するレトリック。日本語では「反語」というのが一般的であろう。

歴史的には、自ら無知を装いつつ、逆に相手の無知を暴いて自覚させる方法論としての(ソクラテスの)「問答法」、自らの状況を十分に認識せずに意図せざる意味が加えられてしまう(ソフォクレスに由来する)「悲劇的アイロニー」等の古典的なものがまず挙げられる。ドイツ・ロマン派においては、ノヴァーリス等文学者、フィヒテ等哲学者による、意識的に対象とスタンスをとり、様々なニュアンスをもたらす表現法としての「ロマン的イロニー」が、さらにはニュー・クリティシズムやロシア・フォルマリズムで詩的言語の特性とされ、批評の方法論としても機能す

るアイロニーが存在する。特にドイツ・ロマン派のイロニーはその後、距離感・客観化・戯れ・宙づり・浮遊等、対象との様々な関係を取り結ぶテキストのいわば「様式」としても機能し、トーマス・マンやムジルの等の近現代の作家の創作技法のなかに深く入り込んでいる。¹⁸⁾

いずれも、「反語」というだけあって、その「字義通り」からのずれがラディカルな形で表れている。すなわち基本的な意味の方向は、正反対を向いている。単純な例を挙げれば、裏切りをあえて「誠実」と表現してみたりする場合である。テキストの創作技法として考えれば、作者と登場人物との距離、対象への批判的なまなざし等、多くの形が知られている。ただ、その徹底化は、自らの表現を支える基盤と根拠を切り崩す。具体的には、真偽の決定不可能性まで追い込まれる、あるいは追い込むことができる自己否定的自己言及文としての論理構造までもを表すことになる。実際、ポスト・モダンの思想家たちの、いわゆる「脱構築＝デコンストラクション」においては、命題の直接否定では表し得ぬ歴史的な構築物の解体に寄与してきたという事情もある。¹⁹⁾

それでは、この反語・イロニー・アイロニーは、メタファー・隠喩と考えることができるだろうか。狭義の意味でのメタファーは、反語と相容れない特性を持っているようにも見える。メタファーの機能的な意味、つまり「何かに喩える＝見立てる」という効果から考えると、イロニーという現象（表現の意味を反転する効果）とは異なるメカニズムであると考えられるからだ。

そもそも、「喩えられるもの＝X」に、あえて「字義通りの意味＝A」では一般につながらない「喩え＝Y」を用いるのは、「字義通りの意味を超えた(=meta-)」何らかの「明示されていない隠された共通の意味＝B」を観察するものに想定させる効果があるからであり、そのためにXをYという表現(＝入れ物)にのせて(＝見立てて)AからBの意味へと移動(＝-phor)させるのがメタファーの論理的な構造といえる。すなわち、メタファーであるX=Yが最初に与えられるが、X=A(Yの字義通りの意味)という図式が成立しないため、最初の等式X=Yを成立させるために、Y=Aという図式をY=Bに変更することで、X=Bという受け入れ可能な意味の転移関係を引き出すというプロセスである。

反語はこのプロセスが次のように変形されていると考えられる。すなわち、与えられたX=Yという表現から、引き出されることが期待される効果としての意味はX≠Yという正反対の等式である。この効果を導き出すために用いられるのは、上述したプロセスでいえば、X≠Aという事実の要請する、Y=AからY=Bへの意味の移動ではない。このような中間項を経由することなしに、つまり、別の共通の特性を想定させることなしに、最初の等式を、逆の意味を表すものとして成立させることが要請されている。

メタファーという言葉や、語源をたどって分解すれば、「メタレベルにおける(意味の)移動」という構図が現れてくる。つまり、オブジェクトレベルでは整合性が取れない表現を、メタレベルにおいて意味をずらし、再びオブジェクトレベルにおいて受け入れ可能な解釈へと移動させるプロセスだということである。メタレベルを観察主体の理解という能動原理、オブジェクトレベルを観察される対象という受動原理に置き換えることができる。このことは、言い換えれば、観

察対象がそのままでは受け入れ難いので、観察主体の解釈のレベルにおいて受け入れ可能なものにする、というよく見られる極めて常套的な解釈戦略であるともいえる。この受け入れ可能な解釈への変更は、先のプロセスでは $A \rightarrow B$ という意味のずらし、すなわち字義通りの意味から転義的な意味への移行によって進められる。

このメタレベルにおける意味のずらし、意味の変更が、反語においては、論理的に考えれば、当初の意味の否定となる。すなわち、オブジェクトレベルにおいて示された $X = Y$ を、仲介項なしに（あえて挙げれば $A \rightarrow \text{非}A = B$ という意味のずらしを通じ）反転することで、メタレベルにおいて $X \neq Y$ という意味へと転換するのである。それが成立する条件ないし要因については歴史的に様々な説明が行われてきた。また、その効果に至っては、先に挙げたような多様な観点（距離・客観化・浮遊・戯れ・宙づり等）から機能的説明がなされてきている。またそれが文学理論・テキスト論・記号論・脱構築等の領域で、決定不可能性を呼び出す自己否定自己言及文の論理構造へと解釈されてきた歴史があることも前述したとおりである。ここではその詳細については論じないが、しかし、次のことだけは確認しておきたい。すなわち、「反語」とは「メタファー」におけるメタレベルでの（観察レベルでの）「意味転換」が、最もラディカルな形で、すなわち「命題の否定ないし反転」として行われたものと解釈される、ということである。反語は、狭義の意味でのメタファープロセスからは逸脱するかもしれないが、その機能から言えば、メタファーの最も徹底化された形式だと、論理的には、見ることができる。²⁰⁾

メタファーにおいては、ある表現の字義通りの意味の一時的切断と、字義通りではない意味への関連付け＝接続が同時に進行し、この二重化された意味による切断と接続が再び統合されるプロセスをたどった。そして、反語・イロニーをメタファーとして捉えたと、この二重化はAと非Aを同時に成立させようとするパラドクス構造をも抱え込む。先に述べたように、ヘイドン・ホワイトは、このプロセスを歴史の時代解釈に適用し、4つの喩法の記述様式の段階的進化が、アイロニーによってまた振出しに戻る循環形式とした。これは、メタファーとしてのアイロニーの通時的な解釈であるだろう。通時的な循環として捉えた場合は、それは弁証法的統合のプロセスとしても、つまりメタファーという観察によって二重化された本義と転義が組み込まれる統合的關係性を作り上げていく過程としても、考えることができるからである。反語はそのプロセスの一段階であり、いずれは解消される論理的不整合と見做すことができる。観察レベルも一次から二次へと整合的にメタ化する。²¹⁾

しかし、これを通時的ではなく共時的に解釈した場合、Aと非Aを同時に許容する、あるいはそのどちらが選択されているのか決定できない自己否定自己言及文のパラドクスの状況に置かれることになる。これは一次観察と二次観察、オブジェクトレベルとメタレベルの相反を解消できないまま、両者の間を揺れ動く状態を意味する。²²⁾ この場合、反語とは、あるいはそれを含むメタファーとは、「対象を整合的な意味に転換して観察する原理」そのものを再度メタフォリックに、ラディカルに反転する、メタファー原理そのものへの抵抗として、つまりメタファーはメ

タファー構造自身に対する否定（無効であることを告げるもの）として解釈できるレベルまで達する。²³⁾

7. オブジェクトとメタの振動（反転運動）を確保する原理としてのメタファー

メタファーがメタファーとして現れる場は、表現がそのようなものと受容され理解される場、すなわち観察の場であった。この観察の場は、観察対象のメタレベルにあると同時に、すぐさま、更なる観察の対象となり、この観察に対してはオブジェクトレベルへと移行する。この観察のレベルの移行は、世界を多重化し観察レベルと相関的に現象させる。前述した（見かけ上の）根源的構成主義ということもできる。メタファーには、このような世界の見せ方、表し方の原理が根源にある。²⁴⁾「字義通りではない」ことによる二重化とその意識化（これがメタファーの暫定的定義であった）も、観察相関的なものである。中心となる問いは、「それは何なのか」ではなく、「それはどのように観察されるのか＝見立てられるのか」となる。世界の見方も、實在論に基づいた「必然性（＝実態としての対象の観察）」を保留しつつ、観察者の視点に基づく「偶発性・偶有性（＝他の観察でもありえた）」が前面化する。実態論の不確実性のもと機能論が拠り所となる。その際、それを支えるメタファーの受容にとって最も優先されるのは、「いかに観察を継続させることができるか」、すなわち「観察のオートポイエーシスをどのようにして可能にするか」という課題である。

メタファーとは、意味のレベルで記述すれば、①意味が二重化され、②接続と切断の継続的選択（意味の指示と潜在化、表出と隠蔽、可視化と不可視化、等それこそメタフォリックに様々な形で表現できる）がなされ、③その過程自体が対象化され観察が二次化（メタ化）する、というプロセスをたどった。これは更なるメタレベルの観察を継続的かつ必然的に要求する。「観察の観察」は観察とそのコミュニケーションの連続を保証する原理となる。その際、二次観察は常に前段階の観察の盲点（指示されなかった差異化）を可視化すると同時に、自らの観察自体の盲点を抱える。むろん、これは、さらに継続する意味の二重化＝切り離しと再接続の連続性によって再生産されていく。論理的な意味構造に置き換えれば、＜同一化／非同一化（＝差異化）＞の差異化という「斜めの＝非対称的な＝レベルを移動する」メタ化によって、最終的な決定は常に先送り（ポスト・モダンの文脈であれば「差延」（デリダ2008）と呼ぶであろう）される。このプロセスは、一時的な切断はあっても再接続が可能になり、接続が完全に遮断されることは回避される。²⁵⁾ この構造は、ルーマン理論の「根源的構成主義」における観察、すなわち＜システム／環境＞差異化と前者の指示（＝後者の前者へのリエントリー）という非対称性と同様な関係にある。

この一次と二次、オブジェクトとメタあるいは主体と客体という二つの観察の斜めのレベルの、レベルを非対称に交差させる関係は、機能的に極めて重要である。というのも、このレベルの非

対称性が、命題の一次レベルでは論理的には矛盾やパラドクスを引き起こしていても、観察行為（＝オペレーション）そのものに関してはレベルの往還あるいは振動が可能になり、観察の継続的接続（＝対象の再生産性）を構造的に確保できるからである。つまり、二つの観察レベルのメッセージが矛盾する決定不可能なパラドクスであろうが、あるいは整合的・段階的な観察レベルの移行であろうが、これらはすべて次なる観察によって差異（新たな情報）を生み続けるプロセス（構造）の状態、一時的切断を含みこんだ接続（＝メディア機能）と考えることができるからである。機能的に見れば、メタファーという観察の中心的メカニズムであり構造の核心（ルーマンならば「コミュニケーション＝情報・伝達・理解の三局面における選択プロセス」というであろう）はここにあると考えられる。

これらは、ことばを変えれば、メタファーという観察はオートポイエーシスの要件と見做すこともできる。論理的な整合性を前提にせずとも、むしろ、意味の二重化がもたらす切断と接続の両義性、観察レベルの移行と両レベルの間の振動、引き出される論理的矛盾とリエントリーによる反転のパラドクス—これら（自己）再生産に寄与する機能的重要性が強調されるべきであろう。²⁶⁾メタファーが引き起こすこのような現象の複合体は、ともすればコピーとトートロジー、模倣と反復の間で衰弱しかねない記号化され体系化された（知の）表現世界、（見かけ上）観察と相関しつつ生み続けられる対象世界を、常に揺り動かし、創発的水準へと引き上げ、あるいは先延ばしとして継続させていく。「切断」と「接続」の交替するオートポイエーシスの先に、「根源的構成主義が含意している閉鎖的な循環を破る」力を認めることができるのであろうか。そうであるならば、「メタファー」とは、「観察」を通じた（実在的な）他者への通路として極めて有望な「メディア原理」であると思われるが。

<注>

- 1) この「字義通りでない意味」・「転義」・「メタファーの意味」の成立を否定する見解もある（デイヴィッドソン（1991）等）。それはしかし、あくまでも「字義通りの意味」自体が変化していないという趣旨であって、対応関係ないし解釈における「字義通りではない意味（≡メタファーの意味）」を否定するものではないと思われる。ここでは後者の事態も含めて「意味」を広義に用いる。
- 2) メタファー解釈における「字義通り」の解釈の非妥当性から「字義通りではない意味」への段階的移行というプロセスについては、認知心理学の立場から反論もある（ギブズ Jr. (2008) 等）。しかし、ここで強調したいのはプロセスそのものではなく、「字義通り」の意味の非妥当性の感知と、それを解決できる意味の転換（適当な「転義」の模索）の試みが、観察・理解の場で起こっているという論理的な想定である。
- 3) ルーマンの社会理論におけるコミュニケーション概念、特に神経システムから援用したオートポイエーシス・システムという特徴については、彼の中期以降の様々な著書で説明されているが、とりあえず Luhmann (1998) を参照されたい。
- 4) ルーマンの社会理論における「観察」概念とは、もっとも簡潔には、「<システム／環境>差異化と前者の指示」と定式化できる。ルーマン前掲書を参照されたい。
- 5) Hörisch, J. (2011)、大黒（2016）等を参照されたい。
- 6) Nietzsche (1988)、レイコフ、G./ジョンソン、M. (1986)。

- 7) アンダーソン (2007)、マクルーハン (1987) 等を参照されたい。
- 8) 佐藤信夫 (1992a, 1992b)、瀬戸賢一 (2002, 2017)。
- 9) 野矢 (2011: 425)。野矢はさらに、「山」の開く「可能な物語」と「笑っている」が開く「典型的な物語」の重ね合わせからメタファーの創造性を取り出している。
- 10) デイヴィッドソン (1991)。
- 11) 大黒 (2016) を参照されたい。
- 12) 村上春樹は「メタファー」を暗示させる登場人物の一人に自分のことを「ただのつましい暗喩です。ものどものをつなげるだけのものです。」といわせている。村上春樹 (2017: 335)。
- 13) 「構成主義」と「構築主義」をここでは区別しない。
- 14) 「ダブル・コンティンジェンシー」概念に関しては次の拙論も参照されたい。鈴木 (1999)。
- 15) 多くの文献があるが概観を得るにはホリオーク、K. J./サガード、P. (1998)。また「想起と集合的記憶」におけるメタファーの役割についてはAssmann (1999) に画期的な論考がある。
- 16) 松浦 (1993: 57)。この観点は「観光のまなざし」として展開できる潜在的可能性を有している。
- 17) このことについては次の拙論を参照されたい。鈴木 (2018)。
- 18) この事情に関しては、例えば、アレマン (1973) 等を参照されたい。
- 19) 文芸批評に関しては、何といってもド・マン (2012) の功績が大きい。
- 20) 「反転」を「隣接」と解釈して、アイロニーをメトニミーと捉える考え方もある。谷口 (2003: 148)。
- 21) ホワイトにおける喩法における歴史記述の循環が、アイロニーにおいて振出しに戻るのとは、この絡繰りから説明可能であろう。ホワイト (2017)。
- 22) これこそがドイツ・ロマン派が追い求めた「漂うアイロニー」であろう。
- 23) メタファーのこのような展開のもっとも早い試みは、柄谷行人 (1983) によるものであろう。
- 24) ブルーメンベルクのいわゆる「絶対的メタファー」とは、このようなメタファーの非論理的 (偶有的) かつ絶対的 (必然的) な表現特性を指すと考えられる。Blumenberg (1999)。
- 25) これは、前述した実在する他者の偶発性と必然性のパラドクスと言い換えることが可能であろう。
- 26) この反転構図は、広く捉えれば、絶対と相対、偶然と必然、全体と部分、クラスとメンバー、主体と客体、コピーとオリジナル、メディアとメッセージ等の対概念で、同じような展開＝相互入れ子構造としての解明が可能である。

＜参考文献＞

- アレマン、B. 山本定祐訳 (1973) 『アイロニーの精神』国文社
- Assmann, A (1999) *Erinnerungsräume*. München、(邦訳は、アスマン、A. 安川基晴訳 (2007) 『想起の空間』水声社)
- Blumenberg, Hans (1999) *Paradigmen zu einer Metaphorologie*. Frankfurt a. M.
- 大黒岳彦 (2016) 『情報社会の＜哲学＞』勁草書房
- デイヴィッドソン、D. 野本和幸他訳 (1991) 『真理と解釈』勁草書房
- ド・マン、P. 土田知則訳 (2012) 『読むことのアレゴリー』岩波書店
- デリダ、J. 藤本一勇訳 (2008) 『哲学の余白 (下)』法政大学出版局
- ギブズ Jr.、レイモンド・W. 辻幸夫他監訳 (2008) 『比喩と認知一心とことばの認知科学』研究社
- ホリオーク、K. J./サガード、P. 鈴木宏昭他訳 (1998) 『アナロジーの力』新曜社
- Hörisch, J. (2011) *Der Sinn und die Sinn: Eine Geschichte der Medien*. Berlin (邦訳は、ヘーリッシュ、J. 川島健太郎他訳 (2017) 『メディアの歴史』法政大学出版局)
- 柄谷行人 (1983) 『隠喩としての建築』講談社
- レイコフ、G. 池上嘉彦他訳 (1993) 『認知意味論』紀伊國屋書店

- レイコフ、G・ジョンソン、M. 渡部昇一他訳（1986）『レトリックと人生』大修館書房
- Luhmann, N. (1998) *Die Gesellschaft der Gesellschaft*. Frankfurt a. M. (邦訳は、ルーマン、N. 馬場靖雄他訳（2009）『社会の社会Ⅰ・Ⅱ』法政大学出版局）
- マクルーハン、M. 森常治訳（1986）『グーテンベルクの銀河系』みすず書房
- マクルーハン、M. 栗原裕他訳（1987）『メディア論』みすず書房
- 松浦好治（1993）『法と比喩』弘文堂
- 村上春樹（2017）『騎士団長殺し 第2部 遷ろうメタファー編』新潮社
- Nietzsche, F. (1988) *Ueber Wahrheit und Lüge im aussermoralischen Sinn*. In: Kritische Studien Ausgabe 1. München (邦訳は、ニーチェ『道徳外の意味における真理と虚偽について』（1995）『ニーチェ全集第Ⅰ期第2巻』白水社）
- 野矢茂樹（2011）『語りえぬものを語る』講談社
- 大澤真幸（2018）「根源的構成主義から思弁的実在論へ・・・そしてまた戻る」『現代思想』48(1)、pp.61－66
- 大堀壽夫（2002）『認知言語学』東京大学出版会
- 佐藤信夫（1992a）『レトリック感覚』講談社学術文庫
- 佐藤信夫（1992b）『レトリック認識』講談社学術文庫
- 瀬戸賢一（2002）『日本語のレトリック』岩波ジュニア新書
- 瀬戸賢一（2017）『よくわかるメタファー』ちくま学芸文庫
- 鈴木純一（1999）「異文化理解とコミュニケーション論」『言語文化部研究報告叢書』35（北海道大学）、pp.85－97
- 鈴木純一（2010）「「メタファー」と「メタ思考」」『メディア・コミュニケーション研究』58、pp.39-56
- 鈴木純一（2018）「歴史記述と喩法に関する一考察」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』27、pp.87－98
- 谷口一美（2003）『認知意味論の新展開』研究社
- 辻幸夫編（2001）『ことばの認知科学事典』（2001）大修館書店
- アンダーソン、B. 白石隆他訳（2007）『定本 想像の共同体』書籍工房早山
- ホワイト、H. 岩崎稔監訳（2017）『メタヒストリー』作品社

<本研究はJSPS科学研究費(15K02448)の助成を受けたものである。>

《SUMMARY》

Observation and metaphor

Junichi SUZUKI

The purpose of this thesis is to examine a metaphor from the angle of the observation. That way, the feature as the function of the metaphor will be brought into shaper focus. A metaphor involves "cutoff" and "connection" processes at the same time while duplicating the meaning of the expression. In other words, a metaphor contains two contradictory elements at the same time. This article analyzes the function of medium of the metaphor from the perspective of social theory. The thesis also argues that paradoxes and tautologies, etc. are a fundamental principle of a metaphor by quoting Luhmann's theory.